風土会

会　報　（2016 年１１月）№67

文責　柴田　悦子

第６７回学習会を，平成２８年１１月１１日（金）19：00～20：00 福翔高校にて行いましたので，報告いたします。

第６７回の内容

講師　重枝一郎先生

いじめ許容空間をつくらない

1　マインドセット
2　なぜ，いじめが起こるのか
3　強制性を教育的に活用する
4　人の気持ちがわかる人が教師と呼べる
5　ないものを観ようと努めることも
6　傍観者から行動者に変える

【演習】

○　「海中たんけん」（GWT）

いじめ許容空間をつくらない

■いじめとは

客観的には小さなことでも，当該者の影響が大きいのがいじめ
相手が嫌がることをする（けんか，いたずら，悪ふざけ，冗談，嫌がらせ，からかい）
（恐喝，暴行，傷害は犯罪）
人が集まるところでは必ずある（2 人以上，夫婦喧嘩がない？）

■いじめ防止対策推進法第 1 条「目的」（平成 25 年 9 月 28 日施行）

「いじめは，心や身体を傷つけます。教育を受ける権利や，人間として生きる権利を傷つけます。子どもの成長に害を与えます。命が危険になることもあります。この法律は，そのようないじめを防止するために作られました。」
（社会全体でいじめはダメだという雰囲気を広げる，生徒たちもいじめ撲滅の雰囲気を作りやすくなる，大人が本気の態度をつくる等の意義がある）

■いじめ防止対策推進法第 2 条「いじめの定義」

「いじめとは，子どもが，ある子どもを心理的･物理的に攻撃することで，いじめられている子の心や体が傷ついたり，被害を受けて苦しんだりすることです。インターネットいじめも，いじめです。」（その子が傷つけばいじめです）

■実効性のある「学校いじめ防止基本方針」

国立教育政策研究所生徒指導･進路指導研究センター「生徒指導支援資料６」参照

■学び続ける教師という意味

どれほど経験豊富な教師でも，いじめ問題解決は不確実で不安定な要素を抱えている。ましては生徒が抱える課題が多様化･複雑化し，しかも教育内容･方法に新たな事柄が加わっていくと不確実･不安定要因は増大していく。準備したシナリオ通りというわけにはいかず，生徒と粘り強く向き合いながら解決することを覚悟しなければならない。だからこそ，教師は教育者として学び続けることが求められる。学び続けるためには，教師同士のさまざまな協働は欠かせない。

■なぜ，いじめが起こるのか
現代型いじめの特徴は，誰もがいじめられる可能性があり，誰もがいじめられることを恐れている。誰も正義の味方になれない。
根本は「人間関係の不安」→満たされない権力欲，傷つきやすい自己愛，肥大した自我，劣等感，わがまま，未学習，ストレス発散，自己嫌悪感→**いじめ衝動**
いじめ衝動によって「いじめたい」と感じただけでは継続的ないじめは起こらない。その空間が許される場所になっていると継続し，エスカレートする。→見てみぬふりをする大勢の傍観者→**いじめ許容空間**
この２つが，いじめが起こる要因

■いじめを防止する対策は
この２つの要因防止が対策となる。つまり，いじめ衝動に対しての取組，いじめ許容空間をつくらない取組になる。
■いじめの四層構造
いじめる人，いじめられる人，観衆（見て楽しむ人），**傍観者**

■先生たちは怖くなければならない
いじめ防止対策基本法もこれまでの対応方法とあまり変わらない。ということは大きな効果は期待できない。子どもにとって深刻ないじめの現場は小さく限定された“あなたの学校”になる。あなたを含めたあなたの学校の校長をはじめとする先生たちが，身体を張って校内巡回を行い，お互いを励ましあって一体となって取り組めばいじめはあなたの学校から消えていく。先生たちはある意味で怖くなければならない。生徒に舐められていては，いじめ，学級崩壊はなくならない。

■強制性を教育的に活用する
３つのポイント
①意味を語る（なぜやるのか，なぜ今なのか，納得させられなくても事前の語りがあるとないのでは違う）
②一貫性をもつ（あの先生は失敗は怒らないけど，手抜きのミスには厳しい，やらされる意味がわかりやすくなっていく）
③結果的充実感（強制→良い結果の因果関係を体験させる，短い時間と長い時間との組み合わせ）

■いじめを相談されたら
本人をいたわり，言いに来た勇気をほめ，安心感を与える。しかし，安心感を与えるのはこの先生は全力で守ってくれると思われないと無理。本気で取り組めば少なくとも暴力や悪口など露骨ないじめはすぐに止められる。通り一遍のお説教や正論だけで終わらせず，きちんと問題を処理する。仕返しを怖がることが予想されるが，学校の大人全体が全力で守るし，それでも仕返しをしようものならそいつはとんでもない目にあう，その覚悟がそいつにあるか？もし，いじめが止まらなかったらすぐに大人に言いに来て。ありえないぐらいにやっつける。それでもいじめた側の心が変わらないかもしれない，嫌な雰囲気は残るかもしれない。でも必ず君の味方で君を支える。大切なのはいじめられた子の心を守ること。（まわりの視線がない場所で話す）

■心の傷
縦よりも横の関係性が大きな影響
関係性の質を高めると学力も向上する
友だちのたった一言が一生残る年代
自分の一言でその人の一生の自信を与えることができる。また，逆に一生の心の傷として刻むこともできる

■人の気持ちがわかる人が教師と呼べる
私たち教師は，どれだけ多くの人と関わってきたか。そんなに自慢できる人数でもないはず。限られたメンバーと交流しているに過ぎない経験則の中で，自分はどんな教師で何ができるか，また，今どうしていくことが教師としての成長につながるか。
「人の気持ちがわかる」とは冗談を言って笑い合うことではない，人のつらさ，苦しさ，悲しみ，孤独，それらのことを自分のことのように感じ寄り添えること。その子が悲しむ姿を見た親の気持ちは心が張り裂けんばかりになることも・・・

■ないものを観ようと努めることも

いじめがある。あるものは観える。では，ないものは観えているか。いじめがない。ないものを観るとそこには，感動や真実が隠れていて，それを観なければ，真にほめることも信頼することもできない。例えば，ゴミが落ちていないときは誰かが拾ってくれている場合がある。その拾った人を見つけたときには感動とともに感謝の気持ちがわいてくる。いじめ問題がないときに誰が何をしている？教師のプラスのストロークでルールの暗黙化ができる。

■0 次対応が鍵

トラブルを大きくしないために第 1 次対応（担任団，生徒指導主事）→第 2 次対応（管理職）→第 3 次対応（市教委，第 3 者機関・裁判）におけるポイントも大切であるがむしろ「0 次対応」ともいうべき初期の担任レベルの応対が開発的生徒指導といえるものである

いじめかいじめでないかは大きな問題ではない。大事なのは，いじめが起きている可能性がある段階，あるいはいじめにつながることが考えられる段階で何らかの対応をとる。

いじめ問題が起きる前にどれだけ生徒と信頼関係を築けているかが重要

信頼関係をつくるためには生徒同士の横の関係をつくる授業をする中で教師が参加的にすることがポイントになる。そのためには教師のコミュニケーション能力が高くなければならない。しかしそもそも教師のコミュニケーション能力は高いと思うか？おそらく高くはない。（最後まで聞かない，話の腰を折る，理屈を述べはじめ相手が話したいと思わない，自分だけスッキリ等）だからこそ生徒に対する開発的生徒指導の実践は生徒のためでもあるが，教師と生徒の信頼関係づくりのためでもある。

■「叱られるスキル」の不足

指導しても反応が表面化しない場合がある。これは叱られたときに全人格を否定されたと感じて，必要以上に深刻に受け止めて極端な行動に走ったり，どう反応してよいかわからず，反省を態度で示せなかったりする。どんな言動が相手にどう伝わるか等のソーシャルスキルＴＲ等の取組も大切である。

■実践的対応力

いじめ対策もアンケート用紙作成や集計など机上の作業が多くなっている。やはり以前諸先輩たちが学校現場に残してきた実践的技術の重さを再認識する必要がある。手の空いた時間には，校舎内外を歩いて生徒を見て話す,死角になりやすい場所へ意識して足を運ぶ，放課後には地域に出てそれとなく生徒の行動を観察する，得られた各種情報は職員室の雑談の中で共有する。時代遅れ？泥臭い？でも事後対応ばかりになるよりまし。ハインリッヒの法則を認知しているか？痛い思いをしたことはないか？1 件の重大な事故の背景には２９の軽微な事故があり，その背景には３００のヒヤリ，ハットがある。

「いじめかな」「嫌がっているな」「楽しそうに見えないな」という意識をもてば，いじめが見える。

「ひとりになれる　ひとつになれる」これが教師としての実践的対応力，生徒にも身に付けさせたい力になる。

■初頭効果でクラスの空気をつくっているか

生徒を傍観者から行動者に変える。「○○中生の 1 日の流れビデオ」

■6 月に徹底的にいじめ防止対策を行っているか

何もないと思ってもある。

ダイナミックに１ヶ月間！

「ポジティブリスニング」，「いじめられているあなたへ」「いじめているあなたへ」（心の手紙），「言われてされてうれしいこと」「言われてされて嫌なこと」（ビーイング），「学級目標の振り返り」，「担任清掃交流」（こだわり清掃），「アサーションＴＲ」，「仕事実績重視で学期末にリーダーを考える」等

■学級風土（性格）＝学級文化（意図的，計画的に継続した後に）＋学級の雰囲気（その場の状態）

効果として，問題行動抑制，肯定的行動促進，配慮を要する生徒に対しても自然な手助け。

■教師の個性
・ふんわり型：プレッシャーをかけずゆったりと面倒を見る
・きびきび型：常に課題を投げかけて考えさせる
生徒は反抗も含めて教師の行動に応じて反応してくる。

■学級風土をつくるプロセス
（1）目標づくり
「どんなクラスにしたい？」「どんな風に変えたい？」「どんな行動が大切？」「その行動を増やすためにはどうしたらいい？」
（2）目標を刺激する授業
生徒を行動者にする
【演習】「海中たんけん」（GWT）H27･12･2学校教育相談の理解の講座より
（3）くり返し
教師が関心を持ち続ける（週1回は目標を振り返る）
（4）関連付けて振り返る
波及効果をつくる

解　説

日常でどれだけマインドセットできるか

「マインドセット」を辞書で調べると，次のように説明されています。
『経験や教育，その時代の空気，生まれ持った性質などから形成されるものの見方や考え方を指す言葉です。信念や心構え，価値観，判断基準，あるいは暗黙の了解や無意識の思い込み，陥りやすい思考回路といったものもこれに含まれます』

例えば，「この部屋の中に赤色のものは何がありますか」と言った後，目を閉じさせて，「どこに青色のものがあったか思い出せますか？」と問われると，びっくりします。
そのような「ズレ」が，日常で教師と生徒の間に起きているかもしれません。そもそも，教師と生徒の「マインドセット」が同じなのかどうか。同じようにマインドセットされていないと，肝心なことが伝わりません。目の前の生徒に，どれだけマインドセットができるか，日常の教育活動が大切です。

なぜ，いじめが起こるのか「言語化」する

いじめについては，教師が粘り強く向き合いながら解決しようとする「覚悟」をもつかどうかが重要です。また，教師同士の協働が欠かせません。生徒のパーソナリティに原因を求めるのではなく，まわりの人的環境が大きく影響します。
文部科学省　国立教育政策研究所が平成２８年６月に発行したリーフレット「どのように策定・実施したら，「学校いじめ防止基本方針」が実効性のあるものになるのか？－中学校区で取り組んだ２年間の軌跡－」なども役立つかもしれません。ただ，準備したシナリオ通りにはいきません。
なぜ，いじめが起こるのか。自分なりに言語化することも大切です。
「いじめたい」といういじめ衝動だけでは，継続的ないじめにはなりません。いじめのベースには，人間関係の不安があります。見て見ぬふりをする傍観者がいると，いじめを許容する空間が生まれます。そのいじめ許容空間をつくらないことが大切です。

先生たちは怖くなければならない

教師が生徒に舐められていては，いじめはなくなりません。まず，教師が覚悟をもっていることを生徒に示していきます。教師が意地を張るわけではなく，一貫性のある言動やブレない姿勢を見せるのです。教師というだけで，生徒にとっては強制性があります。それを，教育的に活用します。許せないときは烈火のご

とく怒るという姿も，時に生徒に見せる必要もあります。そのうえで，意味を語ります。そうすると，生徒は素直に教師を受け入れます。それが，信頼関係を強くします。

結果的充実感をもたせる

生徒は，ただ耐えるだけでは，不満をもちます。やはり，結果を出して満足感や充実感をもたせることが大切です。スモールステップで結果を実感させると，教師との信頼関係も強くなります。

また，教育相談的スタンスは大切です。生徒に伝われば，信頼を得ることができます。

友だちから裏切られるのは一生の「心の傷」

教師が，「自分が中学校のときは・・・・・」と考えて，自分の経験から自己開示をすると，生徒は真剣に話を聞きます。それは，真実なので話の熱意が伝わるのです。教師の指導も大切ですが，影響力のある「横の関係」を語ることも大切です。友だちの影響力について語ることは，「学力向上」にも「いじめ防止」にも「不登校予防」にも，つながります。

ないものを観ようと努める

あるものは見えます。しかし，ないものについては見落としがちです。例えば、「いじめがある」から怒るのは普通の発想です。それでは，「いじめがない」状態について，どれだけプラスのストロークを伝え、ルール化しているでしょうか。「いじめがないから，学力が上がっている」「○○がいいから・・・・・」というように，ルールやマナーにしていくのは，とても効果的です。

叱られるスキル

生徒を指導していて，この顔で本当に反省しているのかと疑問をもつことがあります。かわいげのある「処世術」をソーシャルスキルとして学ばせることも，今の時代は必要です。教師は「こうなるはずだ」と思って指導していても，生徒は，どのように反応すればよいかわからず，パニックになっている可能性もあります。このような場面ではこのように返す，というトレーニングを仕組むことで，叱られ方を学ばせます。

ハインリッヒの法則

１件の重大な事故の背景には２９の軽微な事故があり，その背景には３００のヒヤリ・ハットがあると言われます。そのような意識をもてば，いじめが見えるようになります。

基準を与えると行動者が増える

「ハインリッヒの法則」や「初頭効果」などを効果的に教育活動に組み込み，生徒を傍観者から行動者に変えます。これは，生徒だけではなく，教師も同じです。生徒と日常的にマインドセットを共有していきます。

「学校生活の１日の流れ」をビデオにして４月に見せると，基準がわかります。よいモデルを示すと，生徒がどのように行動すればよいかを理解します。基準を与えると，行動者が増えていきます。

６月に１ヶ月間「いじめ防止」に取り組むと効果的です。ちょうど６月は，ゆるみが見られるタイミングです。教育相談週間を入れるのも６月です。そこで，学級風土を醸成します。

学級文化は，意図的・計画的に継続した後に創られます。学級の雰囲気は，その場の状態です。この二つが合わさって，学級風土になります。生徒と一緒に，学級の状態に見合った目標をつくり，プロセスを大切にしていきます。集団は生き物です。ずっと同じ状態ではありえません。いつも，どんなクラスにしたいのか生徒に問い，ビジョンを共有し，実現に向けて行動者を増やしていきます。

キャリア教育で「夢マップ」

職場体験などの導入で，「夢マップ」を書かせます。夢に数値を入れると「目標」になります。こういう話をするだけで，目標の作り方が変わります。

「夢」→「目標」（数値を入れる）→「予定」（歩み続けると・・・）→「実現」

道がわかると「予定」がたてられます。

このように「マインドセット」しておくと，教師の指示に従います。「教師の指示に従って動く」という波及効果も期待できます。

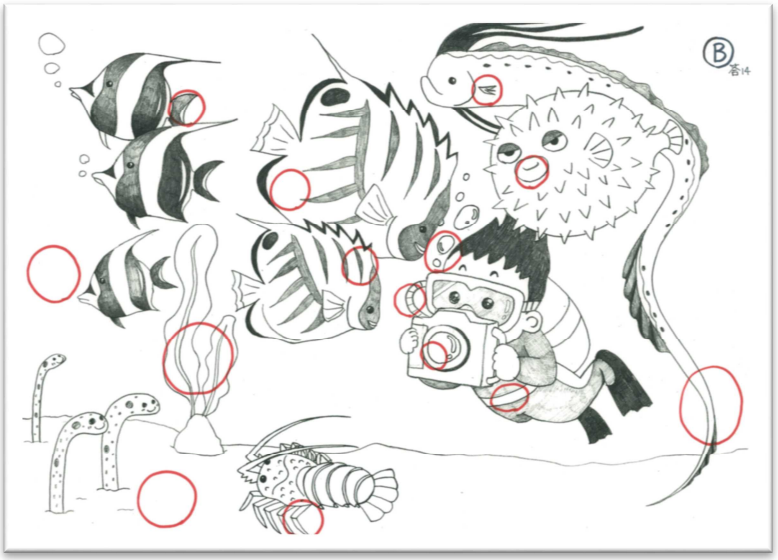
プチ「世の中体験」

職場体験の事業所を，生徒に探させる方法もあります。

また，誰がどこに行くかを決めるときに，３人しか行くことができない事業所に希望が１０人いた場合，「この事業所に行ってこんなことをしたい」というエントリーシートを書かせて，集団面接をして７人を落とすという方法もあります。そうすると，生徒の主体性をつくる素地ができます。生徒の意識を高めることにつながります。そして，面接で落ちる経験は，プチ挫折経験になります。

世の中につながるチャレンジをさせることは，生きた学習です。学校の教育活動に様々な発想で取り組むと，効果的なキャリア教育になります。落ち続けるのも社会です。エントリーシートを書くことが，推薦入試に直結するかもしれません。様々な機会をプチ体験のチャンスと考えて，行動者をつくる素地づくりとします。行動したことは，印象深く生徒の心に残ります。

演習「まちがいさがし」海中探検



今回のキーワード

○　マインドセット
○　ないものを観ようと努める
○　全教育活動で行動者をつくる
○　言語化して整理する
○　学級風土（性格）＝学級文化（意図的，計画的に継続した後に）＋学級の雰囲気（その場の状態）

♪　学習会に参加された先生方の感想　♪　（参加人数　２８名）

・「マインドセット」という言葉になるほど！！と思い，これだけでも様々な気づきにつながったのですが，「つなげる」「行動者をつくる」「教科の授業とからめる」など，どれもこれも，今すぐ実践したいことばかりでした。講話の内容は，自分ではわかっているつもりですが，改めてお話を伺って，自分の足りなさに気付きました。キャリア教育に関しても，今すぐ実践したいことばかりでした。ひとつでも行動したいと思います。

・「ないものを観ようと努める」という言葉がとても印象的でした。ないものには，ないなりのなにかしらの理由があるということで，新しいものの見方に気付くことができました。

・「全教育活動で行動者をつくる」この言葉がとても印象に残りました。すべてはつながっていて，そのすべてを大切に，そのつながりを生徒に考えさせることで，波及効果が生まれる。もう一度，生徒の前で話すこと，関わり方など，いろいろなことを見直したいと思いました。

・言語化して整理できるかどうか，ぜひ実践していきたいと感じました。
「ないものを観ようと努める」とても大切なことだなと感じました。これはお宝でした！
とにかく，モチベーションが上がりました。

・「まちがいさがし」が授業につながるというのは，初耳でした。今度実践するときは，そのことも考えながら生徒に実践したいと思います。また，マインドセットについても，はじめて話を聞いたので，担任として意識して学級経営をしていこうと思いました。

・資料がとてもストレートでわかりやすかったです。日頃，自分が実践していることが文面に書かれていて，正直，自分ではそこまで考えていなかったことが，思いもよらない方向で生徒に影響されていたことに気付き，驚いています。でも，自分がしてきたことはまちがっていなかったのだと自信にもなりました。また，参加させて下さい。

・教員になって２年目ですが，昨年，初任者の時のクラスでいじめが起きてしまいました。その時は，同学年担当の先生方に助けていただいて解決することができました。それから，いじめを未然に防ぐ学級づくりを意識してきました。本日の風土会では，たくさんの知識や考え方を教えていただきました。これからの学級経営に活かしていきたいと思います。

・いじめというテーマで，とても興味深く聞かせていただきました。「いじめ」があるかもしれないという危機感を常にもっていても，気付かない可能性はあるかもしれないですが，今回の「ないものを観ようと努める」気持ちは，新たな発見だし，この気持ちを教師がもつことで，いじめだけではなく，細かな人間関係にも気付けると思います。ぜひ，これから実践していきたいです。

（参加された先生方が，さまざまなキーワードから自分の実践を振り返り，「自分がしてきたことはまちがっていなかったのだと自信になりました」と感じていただくことが，何よりの喜びです。
私たちは実践者であり同志です！！　私たちは自信をもっていい！！
そして，「ないものを観ようと」努めて，「全教育活動で行動者をつくる」関わりをしていきましょう）